

~~御~~

軍務局

艦政局

人事局

法務局

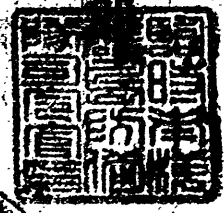
臨南防機密第一二三號

大正六年八月十五日

第一課
第二課

海軍大臣加藤友三郎殿

臨時南洋群島防備隊司令官吉田増次



第二課

艦最上磯礁ノ件

軍艦最上丸 警備視察ノ事 東部方面ヲ巡航セシメタル處

同艦 大正六年七月十六日ヤルト管區ミレ島入港投錨ノ

際 紙 礁 顛末報告ノ通り珊瑚礁ニ觸レ船体

ヲ損傷セル事自カヲ以テ直ニ離礁ニ應急處置ヲ施シタル上ハ

八月六日トシク島歸港セリ途中十一節ニ連續航路セルモ漏

水ナク船体構閣共ニ何等ノ異狀ナカリシ

新田機関中佐及横須賀工廠ヨリ出張中ノ該訪造船中監ニテ



六年九月拾日



9.6

損傷部ヲ検査セシムルニ別紙見取圖ノ如ク損傷アリ應急修
理ニ適切ニ施サレ目下ノ處普通通航海ニ支障ナキ内地ニ歸還上
修理スルヲ要ス左記書類相添ヘ

右報告ス

追而最上巡航中視察シテ便乗セテ當隊參謀長井少佐見聞
スル所ニ依リ觸礁前艦長航海長等ハ頗ル細微ノ注意ヲシ居
タルニ當時天候ノ障害ニ依リ碇泊場附近ニ於ケル礁脈ノ判別
ハ稍々困難ナリ之方如シ

軍艦最上觸礁顛末報告 一 枚

合 右船体損傷見取圖 一 枚

合 右艦進着綫插略圖 一 枚

(終)

最上吐礁嶼未報告

一吐礁前

大正六年七月十五日午後三時五分「ヤル」島出港原速
 十一節「ミレ」島＝向「聖」十六日午前三時十五分「ミレ」島
 「ヲ認」是「於」「ミレ」島東北方適者「ト認」ル位置「ニ投」
 錨「目的」ヲ以「テ」「ミレ」水道＝向「ト適」宜「ノ」鐵路ヲ採リ
 今日午前五時十三分半速「ヲ」今水道ヲ「過」ス「南」
 後南十八度西定針「ト」原速「ヲ」ミレ島南端「ニ」指「向」ス
 水道「通過」＝先「ケ」見張「真」ヲ前橋及西艇信號台＝
 配「シ」投錨手ヲ西艇＝配置「シ」見張ヲ四墩「ニ」ルト同時ニ
 測深ヲ行「ヒ」テ航行セリ
 水道「通過」前後水深九尋乃至十尋ヲ「報」ジ「テ」續キ水
 深「著」シキ变化ナキヲ知リ「テ」大正四年「ト」早今島巡

海 軍

0201

航報告記載中ノモノニ照合スルニ致セサルヲ以テ五時五分
 半速續テ微陣トシ水深精測ノ結果九尋乃至十五尋
 ヲ得測深ノ誤リ十キヲ確ノ今四七分由ビ半速トシ同
 一ノ針路ヲ航進セリ
 午前六時頃至リヨミレ島ノ陸岸ニ國旗美南洋興
 業會社々旗ヲ掲揚セル旗竿ヲ認メタルヲ以テ泊地
 此ノ方面ニ求ルノ便宜ナルヲ思ヘ惟シ六時九分少シク右舷
 ニ轉航シ航海長ヲ三ノ航ノ操縦ニ任セシメツク南三十七度西
 ニ麥針陣續々行セテ測深ニ注意シツ、更ニ信號台ニ將
 校見張リ配シ泊地ニ進入セリ當時天候曇水色ニ依
 ル暗礁ノ針別充分ナク風向東カニ小波アリタリ
 六時半分水深九尋半旗竿巨高ニ千五百米ノ頃微陣
 次テ入港用意ヲ命ジ本職自航操縦ヲ司ヒ今五分水

深八尋半巨為二千二百載ヲ得前方濃藍色ナル水色
 稍薄ラゲルヲ認メ西舷機ヲ停止セリ今五十分水深七尋
 見張負ヨリハ前方處々黒色ノ所アリト報ヲ得續テ自ラ右
 舷側ニ黒色ニ變ル所アルヲ視認シ又前甲板掛將
 校ヨリ黒色ノ所ハ淺シト報ヲ得直ケニ左舷錨ヲ投下セリ
 此ノ時前方海面ノ状況ハ所々黒色ノ變色アルヲ認メ次ニ
 後部ヨリモ亦黒色ノ所アルヲ報ヲ得テレヲ以テ機械ノ面
 轉ニ依ラス錨ニ依リ徐ニ船ノ前進ヲ阻止スルノ旨ナルヲ信シ
 機械ヲ又轉セリレヲ以テ船ノ前進ノ隋力消滅ス極微ノ
 速カラシメ六時十九分船中部附近ニ於テ靜カナル錨礁ヲ
 感ズルト同時ニ前部船底ニ錨礁ニシテラ覺エ船ノ進行ハ
 停止セリ船橋側水深右舷五尋左舷三尋船尾西舷
 五尋水深セル錨鎖四節ニ至

海軍

觸礁位置附近略圖別圖、也

二 触礁後

触礁ヲ感知セテヤ直ケテ防水扉防水蓋ヲ閉メ前後部防
 水扉生レ方用意次ヲ船内底検査ラ令レ同時ニ船
 底索具潜水者(スモグリ)ニ依リ觸礁ノ部ヲ検査セシム
 此船内底異状ナク右舷側機械室船底附近並ニ船
 首微カニ觸礁セシク確メタリ依ツテ船ノ後退ニ依リ離礁ヲ
 試シシト決シ船尾附近他礁ノ存否ヲ探測セシメ六時四
 十二分迄船機後進原速同時ニ錨鎖ヲ縮メ離礁ヲ
 試シタレトモ効果ナキヲ認メ七時七分迄船機ヲ停止セリ
 此時潮時漲潮期ニ在リ確信ヲ得タルヲ以テ潜水器出
 方ケツジアンカ山運搬用意ヲ命ジ更ニ附近礁ノ所在
 ヲ探測セシム、時ノ至ルヲ待テリ

午前八時コケツシヤレカレホシ運搬ヲ終ラザレニ船体微カニ
 米浮揚セルラ感シタルヲ以テ直ニ揚錨ニ着手汽機運転ト
 相俟ワテ船尾ヲ安全ナル方向ニ維持シツ、高礁ニ揚錨
 後風サレ風圧甚錨位ノ關係上船首方向一轉シ風下ニ
 圧流サレ雨ビ危険方向ニ接近シ汽機運転意ノ如ク
 ナス風圧ハ益々船ヲ漸次陸岸方向ニ圧流シ先ノ礁岩
 ニ接近セリ以テ八時半分右舷錨ヲ投下セリ此時船
 ハ高風圧ノ為メ左舷側ヲ以テ静カニ先ノ礁岩ニ圧着セ
 レタル状態ニ在リタリ
 茲於テ先ツ礁岩ヲ離去スルノ急務ヲ認メ八時半分
 先ツ船尾ヲ所要ノ方向ニ保持スル為メコケツシヤレカレ風上
 側所要場所ニ投シ今時ニ船尾附近礁岩ノ在否ヲ
 探測シ安全ナル道路ヲ是メ十時半汽機運轉ヲ止メカレコ
 毎 頁

ツゲアシカシヲ操縦シテ、船尾ヲ所定方向ニ振り向ケテ時九
分ハウアシカシヲ揚ゲケツゲアシカシヲ捨テ機カニヨリ右
退危険区域ヲ脱シ十時至分左舵位置ニ投錨セリ

錨位ヨシ島南端南々西一九五。米

今島北端北西微西々西

水深右舷一三、左舷一四

底質珊瑚細砂

0206

三換傷箇所程度及之対応處置

(1) 船体ノ部

| 換傷箇所 | 換傷程度 | 處置 | 日期 |
|--|--|--|-----------|
| 右舷電磁科要具庫 下折底 自五五八番 至五五九番 四吹向 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 七月十六日午後発見 |
| 水脚大乗庫下折底 自五五八番より上上銀頭一本 至五五九番より上上銀頭一本 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 七月十九日午前発見 |
| 水脚大乗庫下折底 自五五八番より上上銀頭一本 至五五九番より上上銀頭一本 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 七月十九日午前発見 |
| 水脚大乗庫下折底 自五五八番より上上銀頭一本 至五五九番より上上銀頭一本 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 七月十九日午前発見 |
| 水脚大乗庫下折底 自五五八番より上上銀頭一本 至五五九番より上上銀頭一本 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 七月十九日午前発見 |
| 水脚大乗庫下折底 自五五八番より上上銀頭一本 至五五九番より上上銀頭一本 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 自五五八番より上上銀頭一本 外銀接合部より海水少シシテ 外銀接合部より海水少シシテ 自五五九番より上上銀頭一本 銀接合部於テ左右 於テ外銀約四方内方二四公厘 サ約可 | 七月十九日午前発見 |

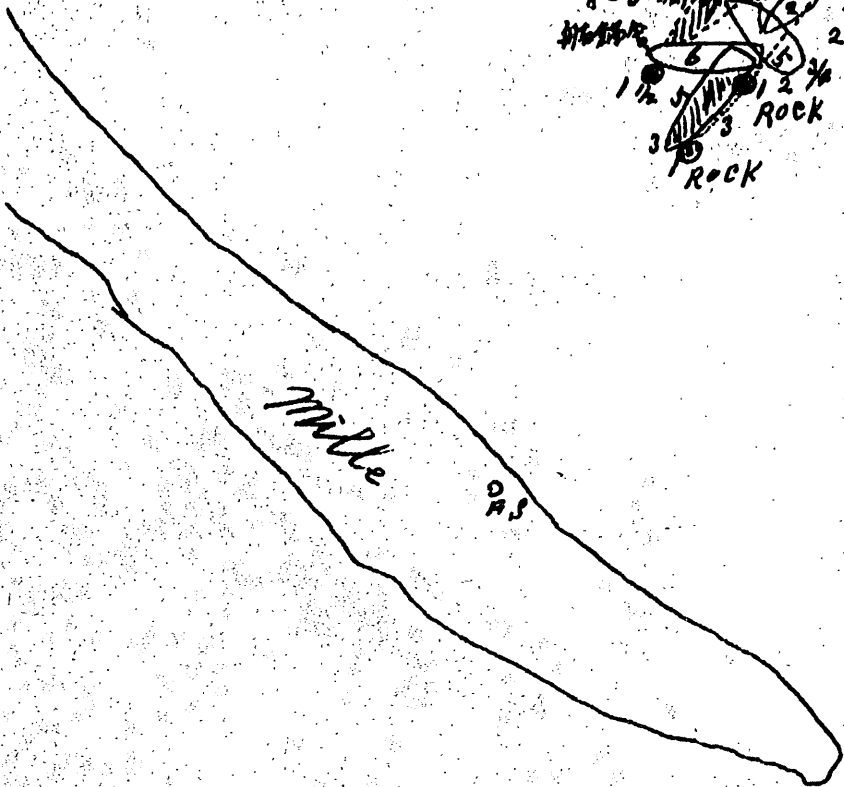
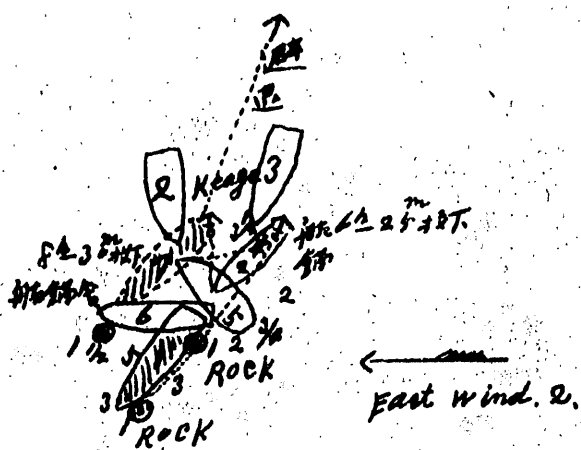
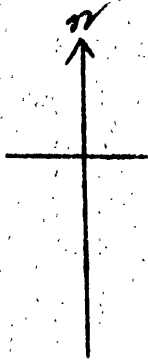
| | | | |
|--|-----------------------------|-----------------------------|-----------------------------|
| <p>右舷機翼一枚尖端より全長約三分二所ヨリ欠損 一枚尖端鋸歯状ナリ</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> |
| <p>右舷機翼一枚尖端より全長約三分二所ヨリ欠損 一枚尖端鋸歯状ナリ</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> |
| <p>右舷機翼一枚尖端より全長約三分二所ヨリ欠損 一枚尖端鋸歯状ナリ</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> |
| <p>右舷機翼一枚尖端より全長約三分二所ヨリ欠損 一枚尖端鋸歯状ナリ</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> | <p>右舷機翼一枚尖端より約二分一外方ニ生申ス</p> |

0209

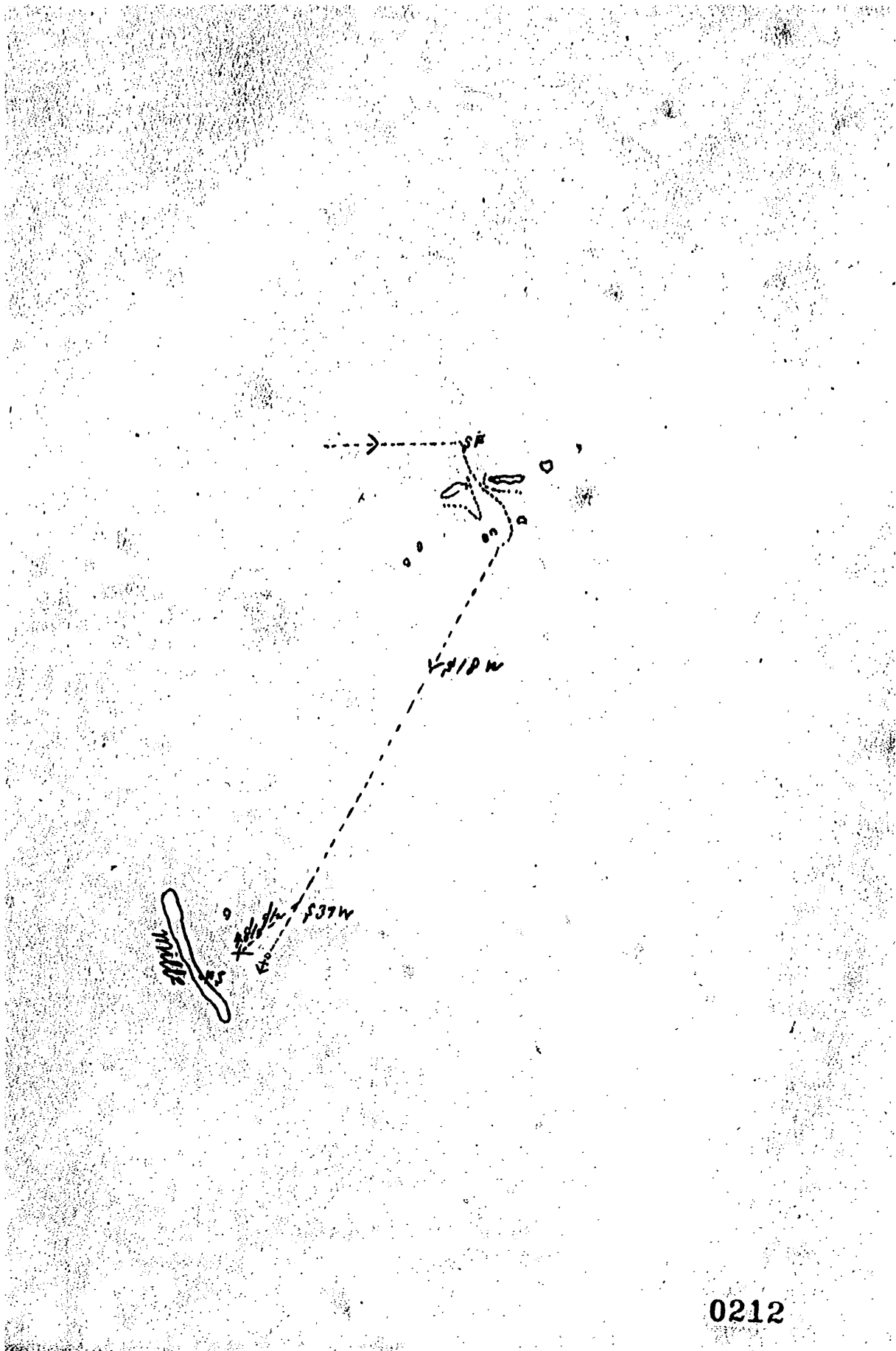
見込充分ナリ機械ニ因テハ目下検査中ニテハ明確ナル解
決シテ下ス能クトモ幾多ノ弊ヲ封スル回轉ニ何等差支ナシ

0210

別
図



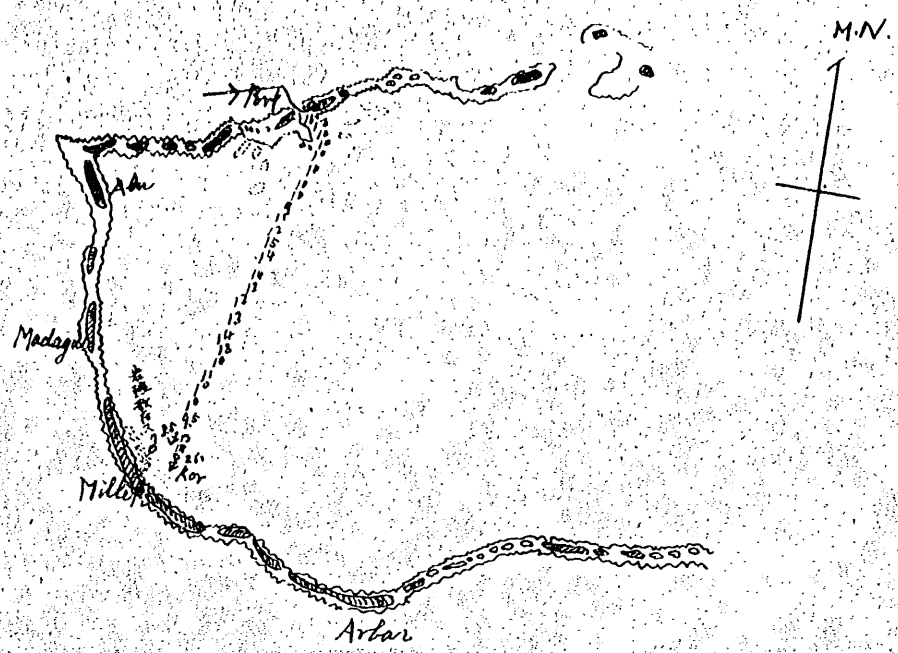
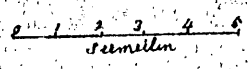
0211



0212

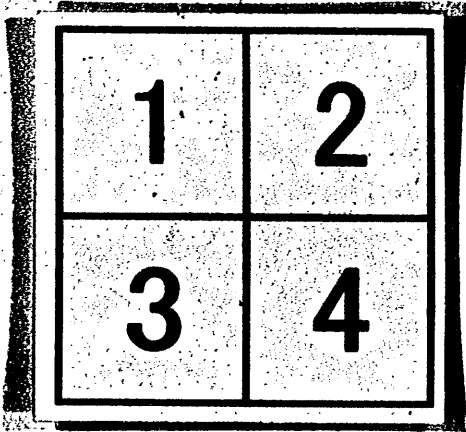
一 本國獨取海國據
 二 水深、改訂也
 三 朱の符、觸礁概位
 朱の符、方二枚、鋪位
 置トス(概位)

Mille 島附近



0213

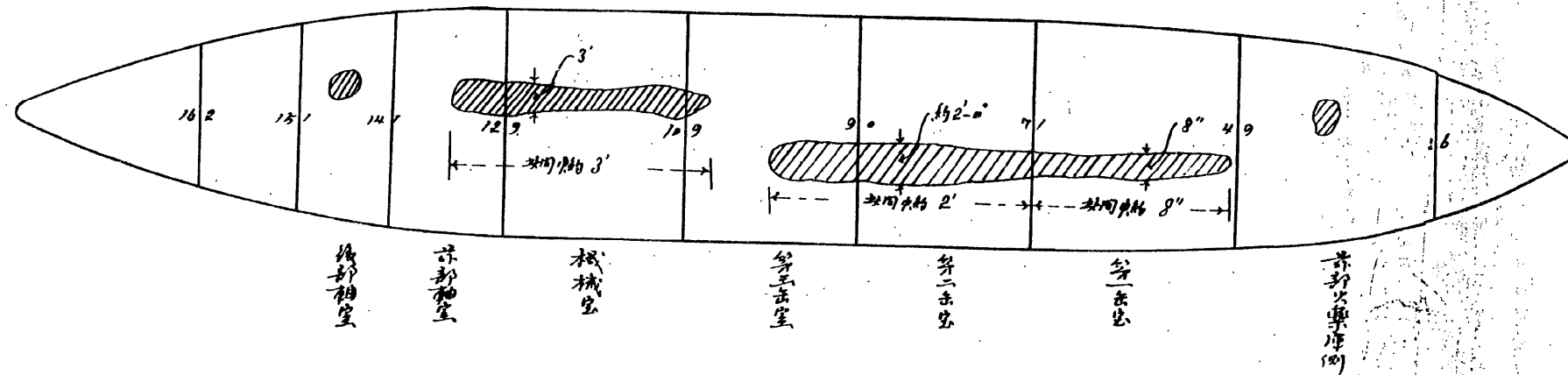
分割撮影ターゲット

| | |
|---------------------|---|
| 分割した部分の撮影順序 |  |
| 分割撮影した理由 | A 3判以上のため |
| 上記のとおり分割撮影した事を証明する。 | |

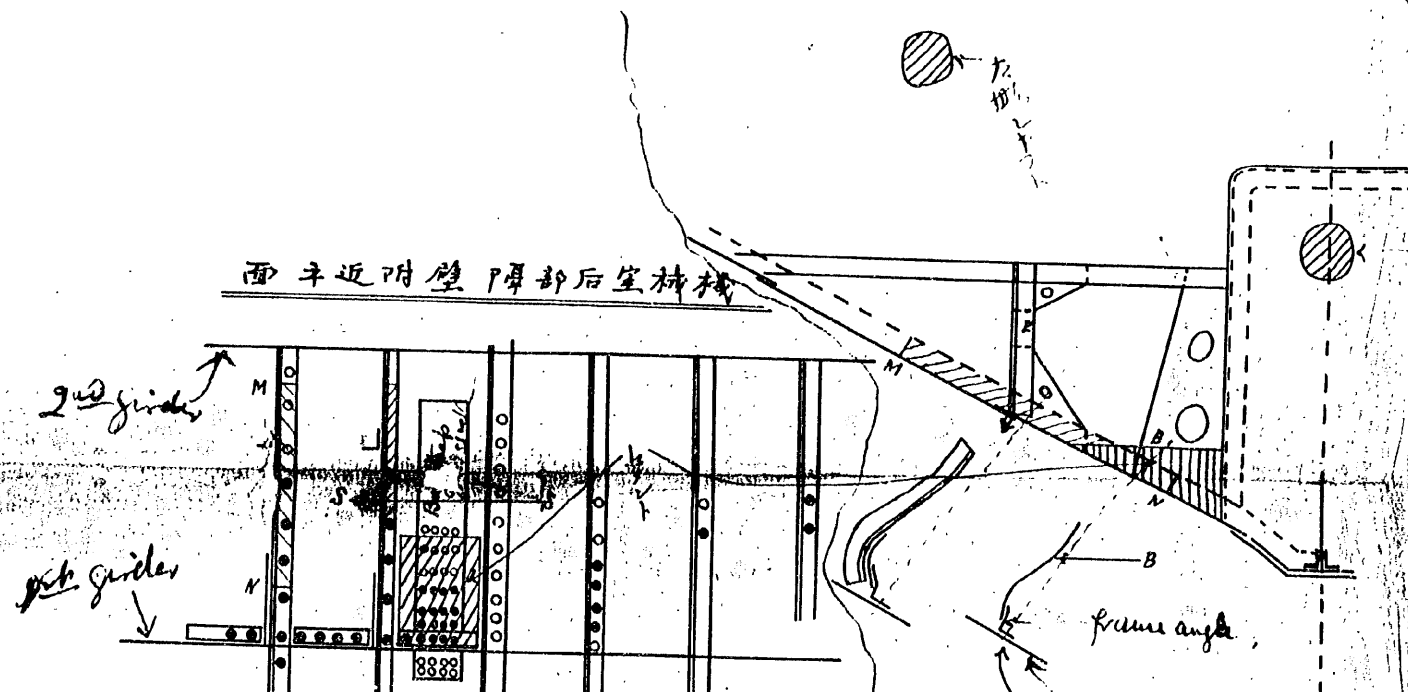
0214
0215
0216
0217

圖略機換艦上最艦軍

圖略所筒晚利料塗底外用層格層海



Section thro fr. 130 (looking forward)

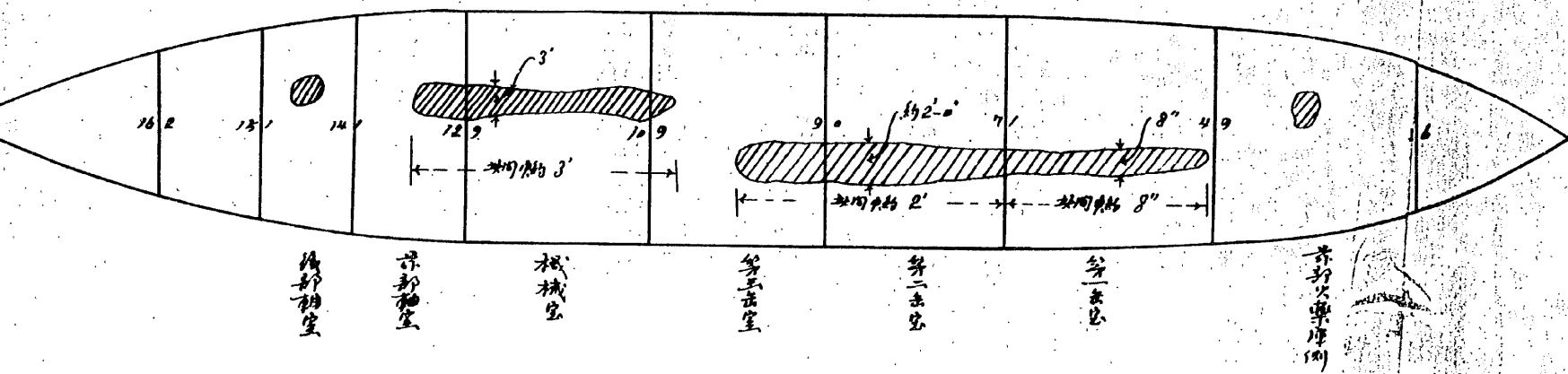


●印不良ヤツト
●印多少不良ヤツト
●印先全ヤツト

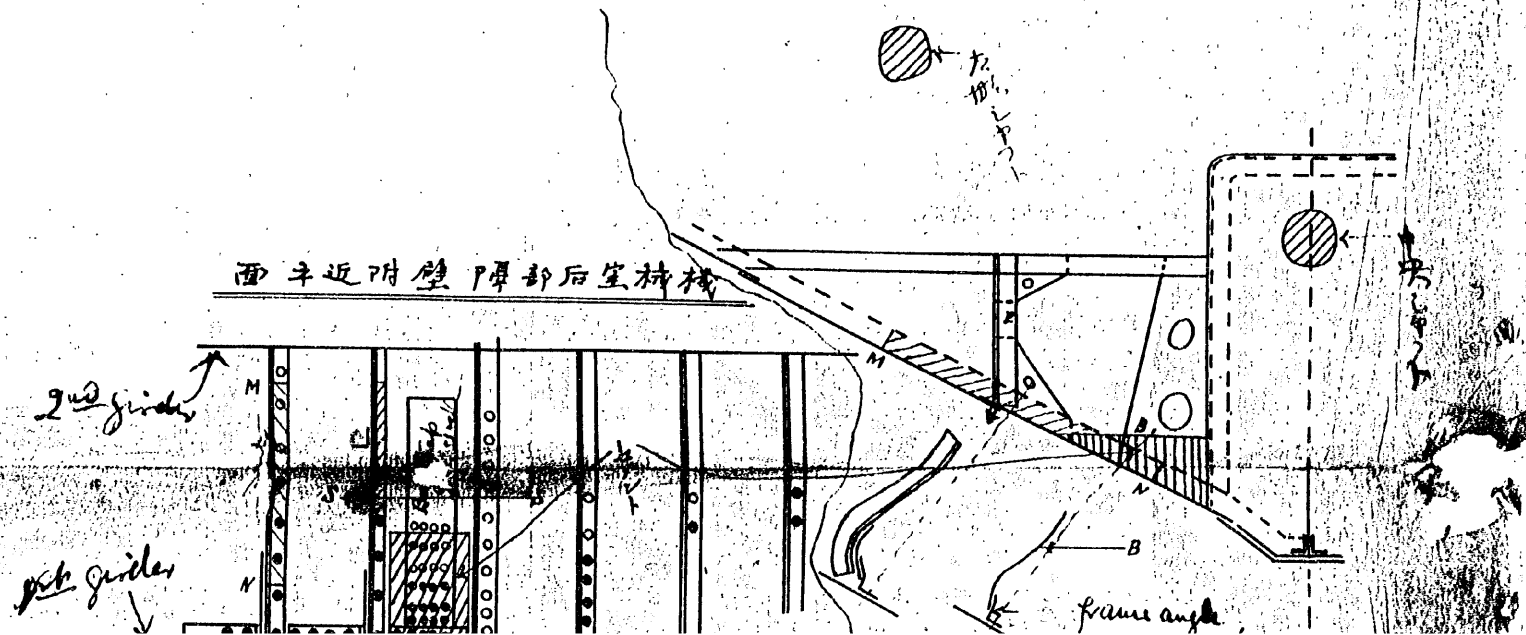
鋼板等取換ノ要スルニ
得テ助材之取換必要ナルヤ
大正七年八月五日 於トウゴウ司令部
海軍造船中監 磯野

圖略淺損觸上最艦軍

圖略所簡脫利料塗底外用層格層漆



Section thro fr. 130 (looking forward)



目下觀海中(下腹内外)漏水全クナシ

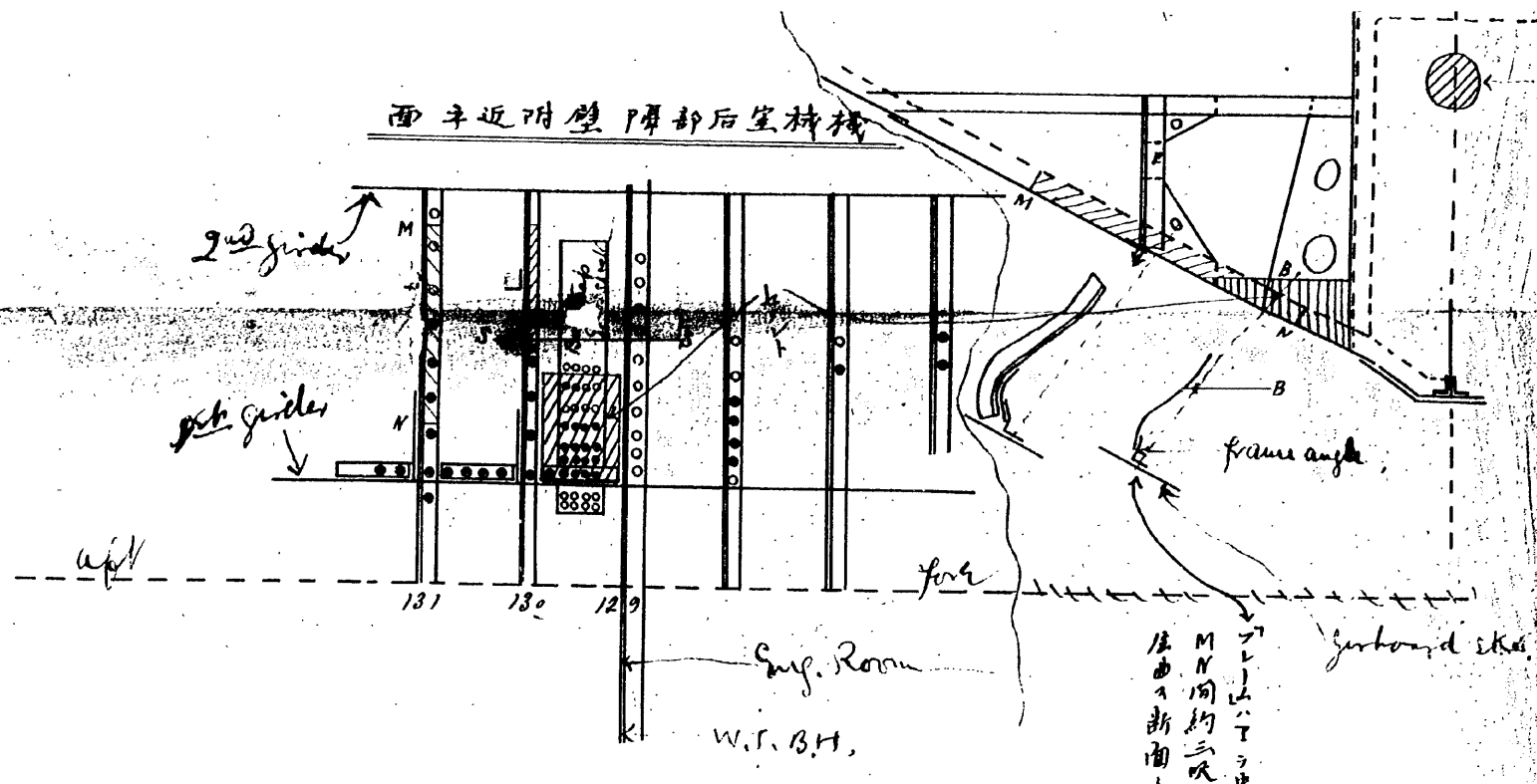
大正七年八月五日 於トリスノ司令部

諏訪造船中監 磯野

海底格觸部之形状、大正所(左圖)ノ未入也
 第一第二倉室下及前部火藥庫係、軸部等一部、
 格觸面、木板、少許隆起アルニ本修理、際し加ユリ
 要スル程度、ナシ非ス
 但し、鉄條、打換、要スルニ、外板、於、二箇本位、ナリ
 鋼板等取換、要スルニ、但、番附、下、部、鋼板、一部、止
 得、之、助、材、取、換、必、要、ナ、ル、ニ

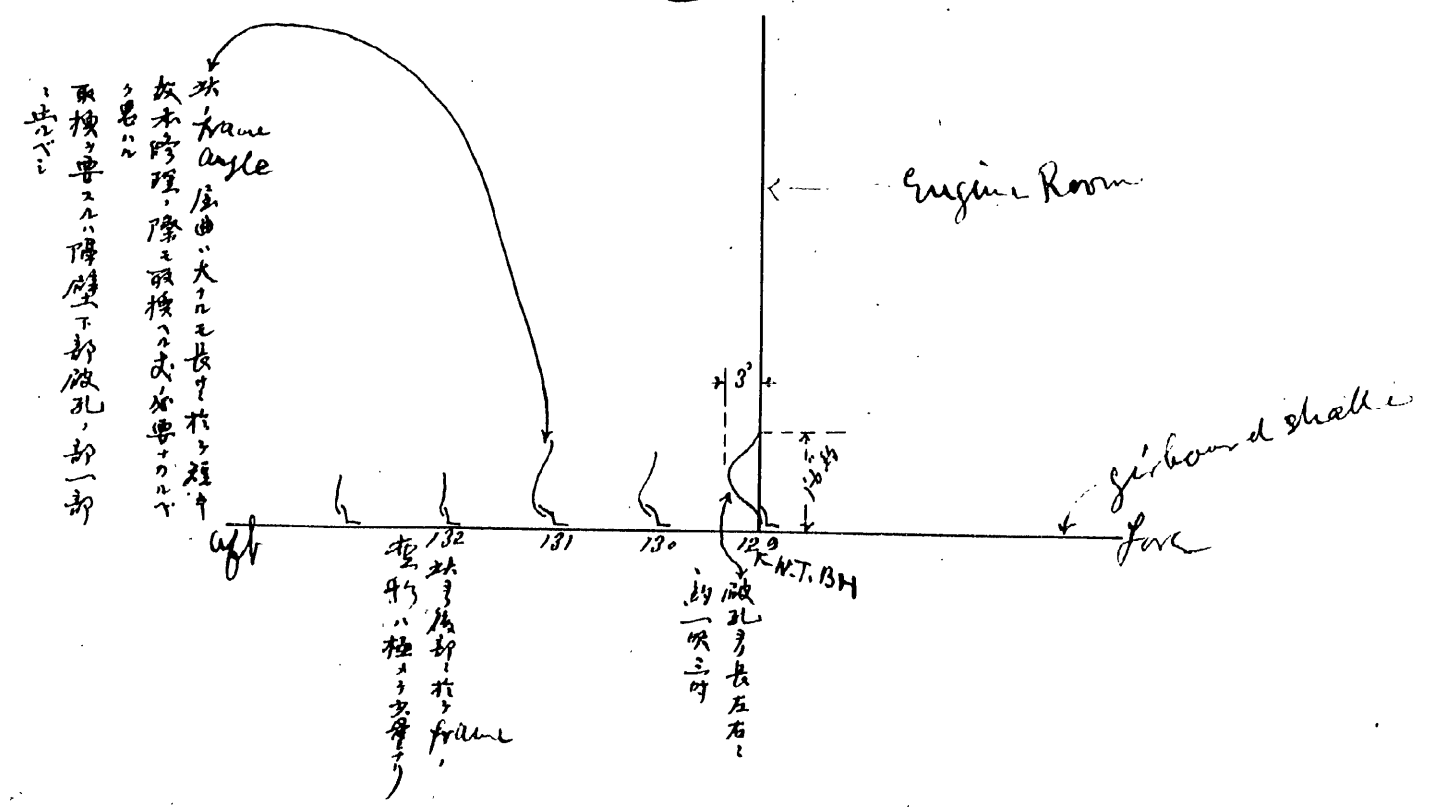
印不長引ヤツト
ホールドに肩挿し
印多不長引ヤツト
水防に完全セルヤツト
印完全セルヤツト

西平近附壁障部后室機機



フレームはT中心に
M N 同約三呎
屋曲の断面を示すが如し

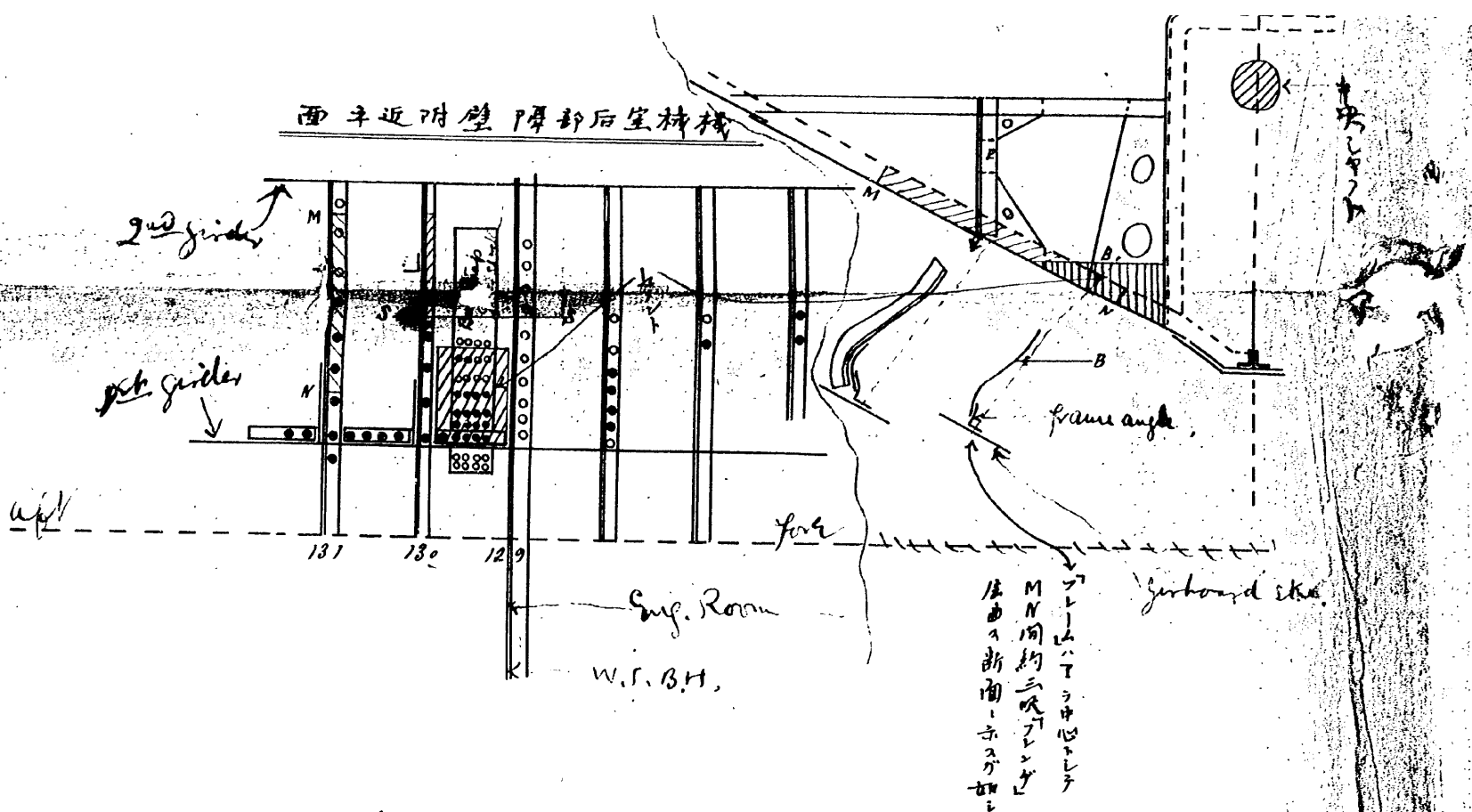
Section at S.S.



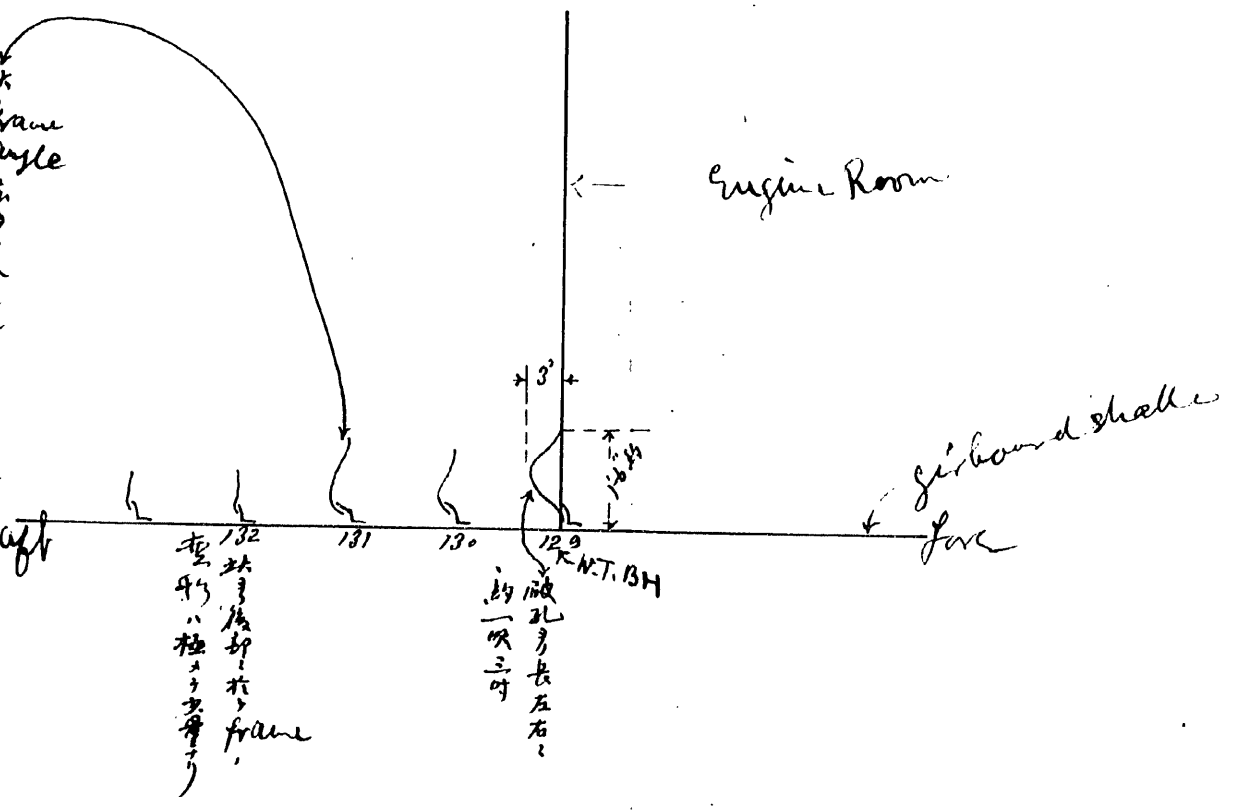
取換要セル障壁下部破孔部一部
共ニ
故本修理の際に取換ハ必要ナルヤ
ク思ハル
取換要セル障壁下部破孔部一部
共ニ

132 枠より後部、
131 枠より後部、
130 枠より後部、
129 枠より後部、
約一呎三吋

船中監 松野
 二部一共
 位ナレ
 部等一部
 際し加工
 (一) 未入如



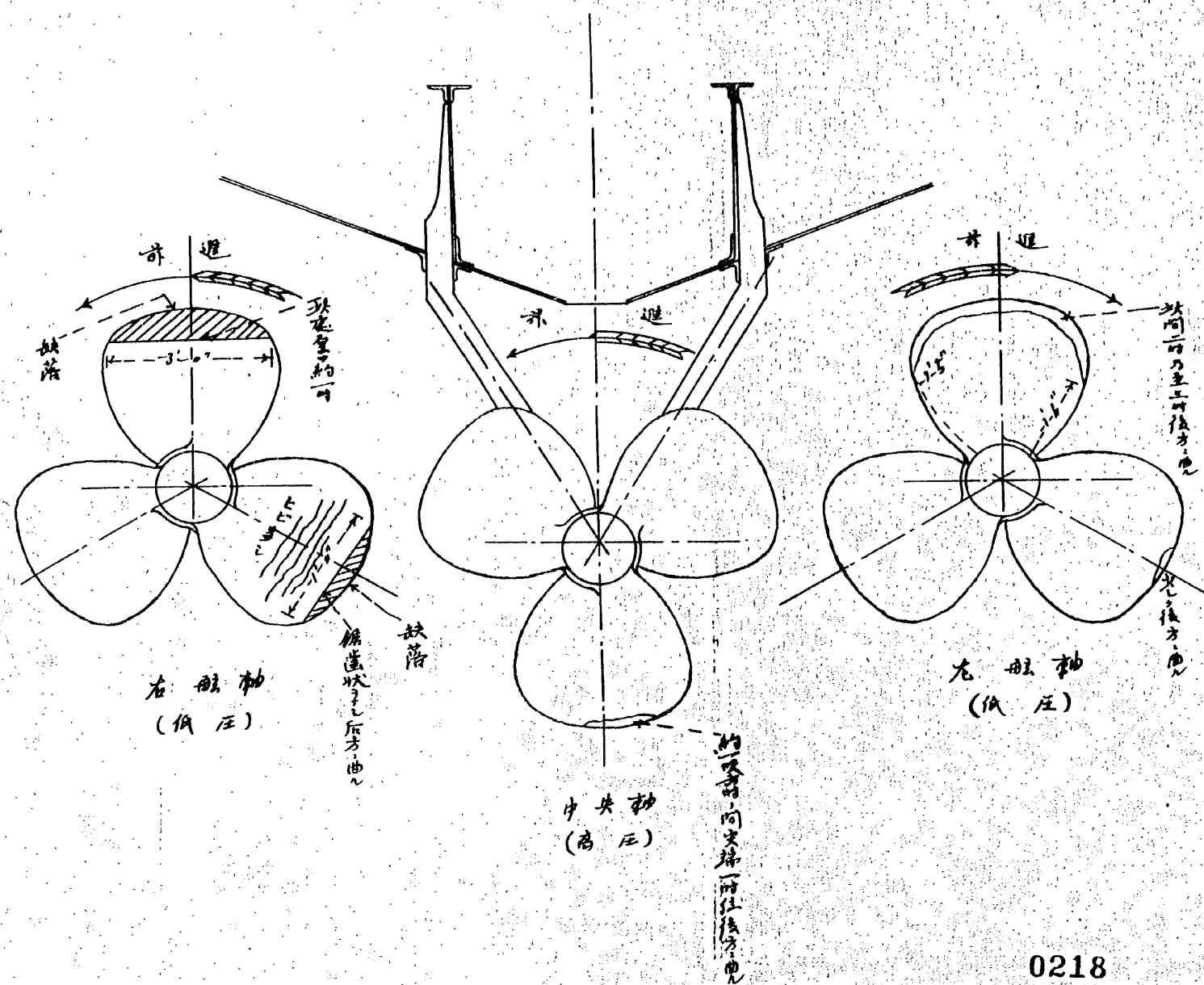
Section at S.S.



單機最上推進器翼缺損圖

(前方及後方均見此圖)

(大機翼面：係以計，此也)



0218

供覽

軍務局

法務局

人事局

臨南防第一六八號二

大南

參

遭難

大正六年八月十五日

臨時南洋群島防備隊司令官吉田増次

海軍大臣加藤友三郎殿

第一課

査問委託ノ件

軍艦最上觸礁ニ関シ之當隊ニ於テハ査問會規則第五條ノ
ノ談當者無之査問會ヲ組織スル能ハス候ニ付同規則第
八條ニヨリ佐世保鎮守府司令長官ニ委託候

報告ス

局員

第一課

海軍

局受

6.11 交換

軍務局支

1 0219

海

軍務局

法務局

人事局

臨南防機密第一二號

大正七年一月七日

臨時南洋羣島防備隊司令官代理

海軍中佐高橋節雄

海軍大臣加藤友三郎

軍艦最上坐礁事件査定報告件

軍艦最上坐礁事件ニ關スル査問終結候條

査定書一通 査之ニ關スル意見一通相添

右報告ス

(別紙添)

第一課長

局員

海軍

遺難

7.2.9

7.1.21 交接

28 0220

軍艦最上吐礁事件査定書ニ關スル意見
本件書類ニ就キ調査スルニ艦長及航海長ハ過失
ニ依リ其艦ヲ吐礁セシメタル責任ヲ免ルヲ得ス
其所爲ハ海軍懲罰令第九條第十號ニ該當
スルヲ以テ同令第十一條第十二條ニ依リ艦長
海軍中佐平岩元雄ヲ謹慎十日ニ航海長
海軍大尉萩原榮七ヲ謹慎五日ニ處スルヲ
至當ト認ム

大正七年一月七日

臨時南洋群島防備隊司令官代理

海軍中佐 高橋節雄

軍艦最上坐礁事件査定書

軍艦最上坐礁事件査問ヲ遂ケ査定スルコト

左ノ如シ

第一 事實

一 坐礁前ノ行動

軍艦最上ハ臨時南洋群島防備隊管區東部方面警備視察巡航ノ命ヲ受ケ艦長海軍中佐平岩元雄指揮ノ下ニ大正六年七月十五日午後三時二十五分ヤルト島ヲ發シ原速十節ヲ航行シ三レ一島ニ向ヒ翌十六日午前三時十五分右舷艦首一點ニ該島ヲ認メタリ爾後艦長ハ艦橋ニ在リテ航海長海軍大尉萩原榮七ヲ監視シ航海長ハ入港用意ニ至ル迄艦橋標幟ヲ同五時十分左舷艦首ヲ用意シ

樁樓及信號臺ニ見張員ヲ配シ針測ヲ行ヒツツ同
 十三分半速ハ節テレニ水通ヲ通過シテ後南十八度
 西ニ定針原速トナセリ航海長ハ該針路ハ獨板海
 圖上ノ錨符ヲ通シテ「ミレ」島ノ南端ニ向フモノト思惟
 シ且大正四年軍艦千早ノ採リシ針路トハ基點ニ於テ
 聊カ異レトモ航路ハ殆ト近似スルモノト思惟シタルニ
 水通通過後ノ水深九乃至十五尋ヲ得千早測
 定ノ水深ニ比シテ差アルカ如ク疑ヒタル結果同三十
 一分半速次テ微速六分即トシテ精測シタルモ自艦ノ
 測深ニ誤ナク且千早ノ測深ハ機器測深儀ニ依リタルモ
 ノナルヲ以テ假ニ艦速ニ對スル改正ヲナストキハ殆ト自艦ノ
 測定シタルモノト大差ナキモノト信シタルニヨリ同四十七分
 ニ至ツテ半速トシ測深ノ結果ト見張ノ警報トニ注

意ヲ拂ヒ同一針路ヲ續航中同六時頃ニ至リ
 シレ一島ノ陸岸ニ國旗及南洋興業株式會社
 ノ社旗ヲ掲揚セル旗竿ヲ發見セリ適艦長モ示
 之ヲ望見シ旗竿ニ向ケ航進セハ旗竿ノ樹ツ處會
 社分店ノ在ル處ナレハ相當ノ錨地ヲ得ラル可ク且交
 通上陸ニモ便ナル可シト提言シタルニ航海長モ之ニ
 同意シ該旗竿ニ関シテハ海圖其他參考書類
 ニ何等記事ナク且其ノ位置ノ不明ナルモ拘ラス
 艦長ニ對シテハ往年千早ノ碇泊セシ位置ハ獨版
 海圖錨符ノ地點ナル旨申告セシノミニシテ新針路
 ニ於ケル錨地ハ測深ト水色ノ變化ヲ鑑識シテ適
 宜ニ選定シ得ラルヘシト想定ノ下ニシレ一島南北
 兩端方位ニ依ル艦位測定ヲモ行ハス同九分標

トノ距離約三千米地點ニ於テ旗竿ニ向ケ南三十七
 度西ニ變針航行シタリ當時天候曇風向東方
 ニミシテ小波アリ水色ノ變化ヲ見テ礁脈ヲ判別スル
 ニ稍困難ヲ感シタリ
 午前六時二十分水深九尋半旗竿距離二千五百米
 ノ地點ニ於テ先任將校海軍少佐鳥野團一ハ艦
 長ニ申出テ其ノ許可ヲ得テ入港用意ヲ令シ同時
 ニ微速爾後艦長自ラ艦ノ操縦ヲ司リ同二十二
 分水深八尋半旗竿距離二千二百米ノ報ヲ得且
 前方濃藍ノ水色稍薄ラケルヲ目睹シテ兩舷機ヲ
 停止シタリ此ノ時ニ方リ航海長ハ前方一面水色淡
 青ナルヲ認メタルニヨリ水深ニ變化生ス可シトハ思
 惟シタレトモ尙未タ危險礁ニ直近シツツアリトハ

豫期セサリシヲ以テ何等艦長ニ注意ヲ促スコトナ
ク同二十五分頃見張將校海軍中尉相馬六郎前甲
板錨掛將校海軍大尉着藤茂モ亦殆ト同時前
方ニ黒色ノ處アリ「黒色ノ處ハ淡シ等ノ報告ヲナ
シ艦長自ラモ右舷側ニ黒色ヲ變化セル處アルヲ視
認シタルトモ何レモ坐礁スルカ如キ危険ニ迫レリトハ思惟
セス次テ水深七尋ノ報アリ艦長モ亦水深浅キヲ認
メタルトモ艦長航海長共ニ尙未タ觸礁スルカ如キ
コトハ全然ナキモト過信シタルニヨリ機械ヲ反轉シテ
艦ヲ停止又ハ後進スル等ノ手段ヲ採ラス單ニ左舷
ヲ投下シタルノミナリシヲ以テ同二十九分艦ハ極微ノ傾
カニテ坐礁停止スルニ至リタリ走出錨鎖四節四分ノ
三水深艦橋右側五尋左側三尋艦尾兩舷共五尋

二字挿入

ナリトス

而シテ投錨ノ際航海長ハ「三ノ島南北兩端ノ方位ヲ測定シタルトモ海高ニ記入スルニ先チ坐礁セシ刹那其ノ方位ヲ失念シ又坐礁ノ位置ニ至ラテハ全ク艦位ヲ測定セサリシヲ以テ何レモ不明ナリトス

ニ 坐礁後ノ處置

前記ノ如ク坐礁スルヤ否ヤ直ニ防水扉蓋ヲ閉鎖シ艦ノ内外底ヲ検査シタル結果内底ニ異状ナク左舷機材室艦底附近ニ艦首ニ僅ニ坐礁セルヲ確メタルヲ以テ艦ノ後退ニ依リ離礁ヲ試ムルニ決シ艦尾附近暗礁ノ存否ヲ探測シ同四十二分兩舷機材室速同時ニ錨鎖ヲ縮メ離礁セントシタルトモ效果ナク同七時七分ニ至ラテ兩舷機材ヲ停止セリ時恰モ漲潮期ニ近ツク

ノ確信ヲ得タルヲ以テ潜水器出し方並ケツガアンカー運
搬用意ヲ命シ更ニ附近暗礁ノ所在ヲ探測シツル
潮ニ乘シテ午前八時ケツガアンカーヲ運搬セシメタル
ニ未タ終ラサルニ艦體微カニ浮揚ヲ感シタリ仍テ直
ニ揚錨ニ着手シ機械ヲ使用シテ一旦離礁シ得タレ
トモ風壓ノ加ハルアリ且各處ヨリ四圍ニ變色ノ處ア
リトノ報ヲ得シ為意ノ如ク艦ヲ操縦スルヲ得ス起
錨ノ際前進力稍強キニ失シ前方ノ暗礁ニ接近
シタルヲ以テ後進セントシタルモ之亦意ノ如クナラス風力
ニ壓流セラレツツ益暗礁ニ接近シ危険増加セルニヨ
リ右舷錨ヲ投下シタリ此ノ際左舷側ヲ以テ
静カニ前方ノ暗礁ニ壓着セラレタルノ状態ニア
リタリ仍テ右舷艦尾ヨリ風上側所要ノ位置ニケ

三
字
明
除

ツダアンカーヲ投シ艦尾附近ノ暗礁ヲ探測シ安全
ヲ退路ヲ求メ同十時三分機材、右舷錨及ケツダ
アンカーヲ操縦シツツ艦尾ヲ所定方向ニ振り向
ケ同九分右舷錨ヲ揚ケケツダアンカーヲ捨錨シ
機力ニ依リ後進シテ危険區域ヲ脱シ同二十一分
錨位「ミレ」島南端南々西一千九百五十米同島
北端北西微西四分ノ水深右舷十三尋左舷十
四尋ノ地點ニ碇泊スルヲ得タリ

三 損害ノ程度

以上ノ事實ニ基キ軍艦最上ノ被リシ損害ハ艦
體並推進器ニ於テ修理ノ爲日數四日ト日費
用二千八百三十五圓餘ヲ要スルニ至リシモノトス

第二 原因及理由

軍艦最上ノ坐礁原因及之ヲ認メタル理由左ノ如

シ
「ミレー」島ノ陸岸ニ望見シタル旗竿ニ向ケ南三十七

度西ニ變針シタルコト

理由「ミレー」島ノ錨地ハ英版水路誌ニ同島ノ

最東端沖合水深十六尋ノ處ニシテ其ノ附近ニ良

好ナル上陸場アリト記載アリ而シテ該錨地ハ獨版

海圖ノ錨符ト略一致スルモノノ如ク認メラルルノミナ

ラス大正四年軍艦千早モ該錨地即チ「ミレー」島

南々西四分三南ニ千米水深十六尋ノ位置ニ碇泊

セル事事實ニ鑑ミ同島ニ初メテ入港スルニ方リテハ

先ツ錨地ヲ此ノ地點ニ選定スルヲ安全ニシテ且碇

實ナリトス然ルニ艦長航海長共豫メ錨地ヲ選

定セテ航海長ハ千早ノ錨地ハ獨版海圖錨符ト
略一致スル旨艦長ニ進言セシノミニテ錨地ヲ決定
スルニ至ラス海圖其ノ他參考書類ニ何等之ニ
関スル記事ナク且其ノ位置不確實ナル旗竿ヲ
目標トシテ變針セシト艦長ノ提言ニ同意シ漫
然旗竿在ル處好錨地在ルヘシト想定ニ基キ
之ニ向ヒ航進セルカ如キハ行船上ノ注意足ラサル
モノニシテ坐礁ヲ惹起シタル第一原因ナリト謂ハサ
ルハカラス

ニ珊瑚礁海未錐測ノ海岸ニ向ケ航進スルニ方リ警
戒方法充分ナラス且艦速ニ對スル注意足ラサリ
シコト

理由 既ニ南三十七度西ニ變針シタル以後ハ千

0231

早ノ採リシ針路ト異ルノミナラス海圖並水路誌等
ニ何等記載ナキ錨地ヲ求メントシテ珊瑚礁海未
錘測ノ海上ヲ進航スルモノナレハ之ニ慮スル方策ナ
カラサルヘカラス然ルニ艦長航海長同一意見ノ下
ニ右ノ針路ヲ採リナカラ從前ノ針路ニ比シテ警告或ヲ
嚴重ニシタル形跡ノ見ユルナク之ヲ南洋群島航海
報告集(大正五年六月刊行)ノ注意事項ト對照
スルニ凡有準備ニ於テ缺クル所アルノミナラス特ニ水
色ノ變化ヨリ暗礁ノ判別不充ナル當時ノ天
候ニ於テハ火急ノ危険ヲ避クル爲メ艦速ヲ極微
ニ減シ且艦首最前部ニ選抜シタル見張員ヲ既
シ海底ヲ透見セシメ以テ危険礁ノ發見ニ努メ萬一
ノ場合ニ於テハ直ニ之ヲ退避シ得ル準備ト餘裕ト

ノ存セサルヘカラサルニ漫然水深ニ著シキ變化ナキヲ
ノミテ過信シ前路ノ航程ヲ樂觀視シタル傾向アリ
リシハ殊ニ此ノ場合ニ於ケル行船上ノ注意足ラサルモ
ノニシテ坐礁ヲ惹起シタル第一原因ト謂ハサルヘ
カラス

三、午前六時二十分微速入港用意後危険逼迫セ
シ際速カラ停止シ若ハ後進スル等ノ機宜ヲ失シ
タルコト

理由 艦長ハ六時二十分以後水色ニ變化アルコ
トヲ知り殊ニ同二十二分前方濃藍ノ水色稍薄
ラケルヲ目睹セシ際モ單ニ兩舷機ヲ停止セシメタルノ
ミ次テ同二十五分正シク危険ニ頻シタル瞬間ニ於
テモ唯左舷錨ヲ投下セシメタルノミニシテ何レノ場合

0233

ニ於テモ艦速ノ停止又ハ後進ニ思ヒ至ラサリシハ機
宜ヲ失シタルモノニシテ即チ最後ノ坐礁原因ヲ爲ス
モノト謂ハサルヘカラス

坐礁後艦ノ内外底ヲ検査シタル結果内底ニ異状ヲ
見ス唯左舷側機械室艦底附近並艦首ノミ僅カ
ニ觸礁セルヲ認メタルカ爲後退離礁ニ決シ長時間
後進原速トナシタルハ稍同意シ難ク或ハ之カ爲ニ却
テ損害ヲ大ナラシメタルヤヲ疑フ爾後離礁ノ不可能
ナルヲ覺リテ之ヲ断念シ適漲潮時ニアルヲ以テ來潮
ニ乘リテ離礁ヲ試ミタルハ適切ノ處置ナリト認ム午
前八時後ニ於テ再ヒ暗礁ニ壓着セラレタルハ大ニ遺憾
トスル所ナレトモ當時ノ狀況ニ於テ或ハ已ムヲ得サリシモ
ノナルヘク最後ニ危險區域ヲ脱シ得タル行動ハ最

毛滴當ノ處置ナリシヲ認ム

第三 責任ノ有無及其ノ程度

案スルニ軍艦最上ノ坐礁ハ同艦々長海軍中佐平
岩元雄及同艦航海長海軍大尉萩原榮七過
失ニ基因シタルモノニシテ其ノ事實ハ前掲坐礁ノ原因
ニ徴シ之ヲ認定スルコトヲ得ヘシ固ヨリ酌量スヘキ情状
ナキニアラスト雖モ平岩艦長及萩原航海長ハ其ノ
過失ニ依リ艦ヲ坐礁セシメタリトノ責任ヲ免ルルヲ
得ス其ノ所爲海軍懲罰令第九條十號ニ該ル
犯行ニシテ懲罰令ニ依リ處罰セラルヘキモノト認ム其
ノ他ノ職員ニ於テハ同艦ノ坐礁ニ関シテ職責上何等
責任ナキモノト認ム

右査定ス

六年十月廿三日
 平山右年佐の明石船長
 萩原大尉の明石航海長
 神谷の明石目下長
 徳島県下長
 此の件は同領長官
 格様より之を以て
 恩料なり

(凡)

新刊
 新刊
 新刊
 新刊
 新刊

0237 0236

海軍省

大正六年十月二十五日

軍艦最上坐礁事件査問會

委員長海軍大佐白石直行

委員海軍中佐堀外喜男

委員海軍中佐名越士朗

委員海軍少佐小林信秋

委員主任 漆川源之丞

0237 0236

